世田谷区立郷土資料館

資料館だより

No. 78
2023.10

since 1964

令和５年度特別展

「館蔵品でみる 宗教美術の造形（かたち）－仏教美術を中心に－」

―会期　令和５年 10 月 28 日（土）～ 12 月 28 日（木）―

写真１　地獄大王獄卒図・部分

今年度の特別展は、当館で久しぶりとなる宗教美術をテーマとした展覧会です。表記のとおり館蔵品が主体で、大半が仏教美術に属するものですが、中には道教や中国の神仙思想に現れる神々も含まれることから「宗教美術」との表記をとりました。なお、世田谷区に関わる（関わられた）方々が所蔵される作品・資料も、参考出品というかたちで展示します。会期は、当資料館では珍しい約２ヵ月のロングランで（12 月 28 日まで）、12 月のボロ市（15･16 日）と重なります。普段よりも多くの方々にご鑑賞いただけるのは、企画担当者としてこの上ない喜びです。じっくりご鑑賞いただき、かつ、楽しんでもらいたいと思います。本稿では、この展覧会についての概要、注目の展示品、関連イベントについて簡単に紹介します。ホームページも併せご確認ください。

概要

出品総数は 50 点。絵画、彫刻、摺（す）り物･捺（お）し物（印刷物）、粉本（ふんぽん）という４つのコーナーを設け、信仰の対象となる尊像や、様々な関連の物語、種々の装飾などバラエティーに富んだ内容です。造形について様々に想いをめぐらし、また、個々の作品の美を味わってもらおうというものです。さらには、美を探ってみてもらいたいと思います。

注目の作品

ここでは、本展の注目作品を、各コーナーから１～２点取り上げて簡単に紹介させていただきます。詳細はぜひ図録をご参照ください。

①絵画

今回の展示品の中でも出色の優品といえるのが「当麻曼荼羅図」（写真２）です。これまで保存を重視して展示はしてきませんでしたが、このたび初公開となりました。鎌倉時代の作で、中央に極楽世界を、周縁に経説や浄土の観想法、往生の仕方を説く、見所満載の作品です。細やかな描写や精緻な截金の技法など、思わずため息が出る見事さです。いま一つは「地獄大王獄卒図」（写真１・３）です。中国・明時代の作で、地獄の者達を描く図ですが、描かれているのは大王に従う冥官と獄卒で、大王は見当たりません。複数幅で構成されていたなかの一幅が本図とみられます。水陸会（中国の施餓鬼会）に用いられた画との見方が提示されています。他にも中世から近世の仏画や大津絵、絵馬など多彩な構成となっています。描写の細密な作品は、スライドショーのコーナーでもご堪能ください。

②彫刻

なんといっても阿弥陀如来立像（写真４）でしょう。端正なお顔に均整のとれた体躯、なかなか優れた出来映えです。制作が鎌倉時代に遡る仏像で、当館美術分野収蔵品の中でも特筆されるものの一つです。過去に一度、館蔵品展で展示されていますが、様々な情報発信を含めた本格的な展示は、今回が初めてとなります。次に、木造の男神坐像と女神坐像（写真５）です。小さなお像で、しかも表面が摩滅し、お顔の表情も明瞭ではありませんが、神像として典型的な造形を示す平安時代後期の作例です。ちょっとかわいらしいかも……、と言っても許されそうな、朽ちた風情に味わいを覚えるお像です。その他では、羅漢立像や懸仏、意外なところで伎楽面、また、木鼻など建築装飾の彫物も、普段なかなか見られない角度や目線から楽しめます。

③摺り物、捺し物

いわゆる印刷物です。ちょっと面白いのは「涅槃図」（写真６）です。大概大画面に多くの登場人物を配すことで知られていますが、本作品のなんと小さいことか。これなら、どんな家でも、壁に掛けて手を合わせられるサイズです。木版摺りで大量生産が可能、しかも安価（たぶん）。庶民にも手の届く仏画です。また、参考出品の印仏も注目です。今風に言えば、ハンコで捺した仏像です。意外な美に触れてください。

④粉本

粉本とは、絵画制作に際して参考とする手本類全ての総称です。中でも実物を忠実に写した模本と呼ばれる粉本は、高い資料価値を有します。ここでは１点「羅漢図模本」（写真７）をあげておきます。「写山楼画本」の朱文印があり、原本を比較的忠実に写しているとみられる興味深い模本です。実物は現存しているのか……。こちらも初公開です。

関連イベント

大きく三つの関連イベントを行います。一つは記念講演で、本特別展のテーマに則したお話をしていただきます。お越しいただくのは、駒澤大学の村松哲文先生と早稲田大学の山本聡美先生です（事前予約制で先着順。受付締め切りは 11 月９日です）。

二つ目は、本展担当者による展示品解説（通称ギャラリートーク）。つまり筆者です。1 時間から 1 時間半程度を予定していますが、会期中、2 回実施します（11/11、12/9）。注目作品を中心に、展示室でわかりやすく解説します。

最後の三つ目は、印仏の実体験コーナーです。ハンコを捺すのとまったく同じ要領ですが、これは印仏による作善（善行を積むこと）を体験していただくものです。捺された仏像は、彫刻や仏画の仏像と同じ意味合いを持ちます。捺すことで、新たな仏像が誕生したことになるわけで、りっぱな作善に通じることになります。自身の願い事を念じて、或いは誰かの供養のため、ご来館の際には、ぜひ印仏による作善をご体験ください。願い事を書き込んでお守り代わりとするのもアリです。なお、使用する紙は、民家園ボランティア「岡本紙漉きの会」の作品（手漉き和紙）を用意しています（但し、なくなり次第終了です。以後は市販の画仙紙をご利用いただく予定です）。

改修工事を経て再開した資料館は、常設展示が大幅に様変わりし、特に近現代の展示コーナーがスペースを広げ充実しました。一層興味関心の湧く展示へ進化したと自負しています。特別展と併せご見学いただければ幸いです。

（学芸研究員　鈴木　泉）

写真２　当麻曼荼羅図（世田谷山観音寺 / 当館保管）

写真３　地獄大王獄卒図

写真４　阿弥陀如来立像
（個人 / 当館保管）

写真５　男神坐像（右）と女神坐像（左）

写真６　涅槃図

写真７　羅漢図模本（個人）

《展示品解説》

板碑

常設展示のリニューアルに伴い、中世の展示スペースでは、前号でも少し紹介したが、板碑と呼ばれる石造物の展示を、ケース内展示から露出展示に変更し、より間近で鑑賞してもらえるようにした（写真 1）。但し、スペースの関係上、1 基のみの展示となっている（従来はケース内で 3 基展示）。展示しているのは、区内堂ヶ谷戸遺跡（岡本 2・3 丁目）から出土した阿弥陀一尊種子板碑で、元応 2 年（1320）の紀年銘を持つ区内出土品としては古い方の板碑である。当資料館には、100 基を超える板碑が収蔵されているのだが、その中からまずこの板碑を展示品として選んだ理由は、世田谷で板碑が出現し、波及し始める 13 世紀後半から 14 世紀前半という時期の板碑として、典型的な大きさ、構成、内容を有していると判断したこと、さらには、区内で最も多くの板碑が出土している場所（堂ヶ谷戸遺跡）からのものであるということ、この二点が大きい。では、典型的な大きさ、構成、内容とはどのようなことか、また、堂ヶ谷戸遺跡とはどういう遺跡なのか、このあたりの説明が不可欠となろう。そこで、本稿では、常設展示解説の補足の意味も含め、それらの点を整理し、もう少し詳しく述べておきたいと思う。

写真１　展示中の阿弥陀一尊種子板碑

板碑は、鎌倉時代から安土桃山時代にかけて造立された石製卒塔婆の一種で、本来供養を目的に作られたが、墓標としても多々用いられた中世特有の石造物である。ほぼ全国に分布し、形態や石材は各地様々だが、本例のような形状、構成、内容を持つタイプの板碑を基本形としている（武蔵型板碑という）。その形状は、山形の頂部と二段の切り込み線（二条線）を有する頭部、主体部である身部、台石等に差し込む基部で構成され、縦長で薄手の板状という特徴がある。構成や内容は、身部上方に信仰対象である本尊の図様や種子（梵字）、名号、題目等が表され、下方には紀年銘や願主名、法号、造立願文、真言などが配される。荘厳として天蓋、蓮台、月輪、華瓶等が刻まれることも多い。種子による本尊・脇侍は、薬研彫りで刻まれるのが通例、という特徴を持つ。石材は緑泥片岩が多用される。

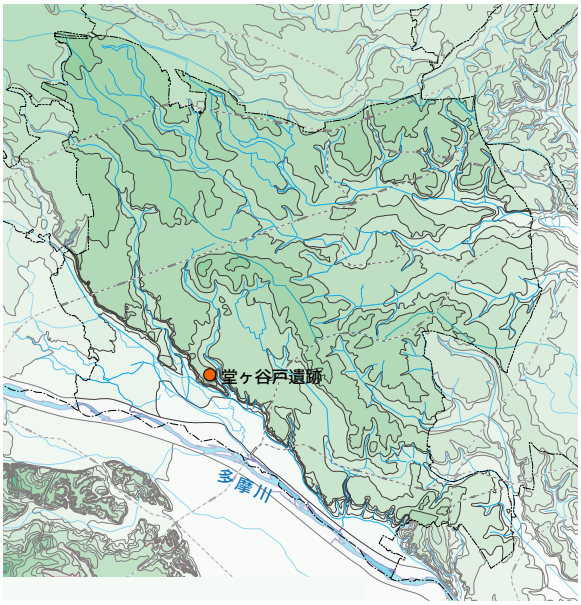


図１　堂ヶ谷戸遺跡位置図

堂ヶ谷戸遺跡がある岡本 2・3 丁目は、多摩川沿いの武蔵野段丘面上に位置する（図 1 参照）。この遺跡は、旧石器時代か

ら近世に至るほぼ各時代の遺構・遺物が検出される複合遺跡で、区内では比較的知名度が高い。この地から、これまで板碑が50基以上出土しているのである。紀年銘のある板碑で確認すると、鎌倉時代後期（13世紀後半）から室町時代（15世紀半ば）にかけての約200年間継続して造立されていたことになる。最も古いのは弘安元年（1278）銘大日一尊種子板碑で、これが現状区内最古の板碑でもある。この板碑を含め、先述した期間の紀年を有するものは10基（一尊形…6、三尊形…4）を数える。一尊形に破損品が一つあるため、完形は9基となる（その平均高は82㎝）。

展示板碑（写真1･2）は一尊形で、法量が高さ87㎝、幅27㎝、厚さ2.7㎝（以上最大値）である。上部に若干の欠損があるものの、ほぼ完形といってよい。主尊種子（＝本尊）はキリーク（＝阿弥陀如来）で、その直下に紀年を一行で刻み、願主や供養者の名はない。種子は薬研彫りで深く丁寧なのに対し、紀年銘はか細くラフな彫りである。構成や内容は実に簡素で、装飾的要素も皆無である。他の完形4基もすべて同様の構成をとる。一方の三尊形は、建武5年（1338）銘阿弥陀三尊種子板碑（写真3）を例に述べると、主尊種子の左右斜め下方に脇侍種子が配され、その下にそれぞれ華瓶が添えられてやや装飾的になるが、それ以外の基本構成は一尊形と変わらない。他の完形3基も構成は同じである。ちなみに、10基の主尊は阿弥陀如来8、大日如来1、釈迦如来1である。

現状、堂ヶ谷戸遺跡出土の板碑のみについてみれば、当該期の傾向は14世紀半ば頃までは維持されているようだ。しかし、こうした構成や内容も、それ以降、時代が下降するにつれて次第に装飾や文言が増えるなどの変化が目立つようになる。今後の作業としては、区内や近隣地域の当該期板碑との比較検討が当然必要となってくる。区内で板碑がかなりの数出土している場所は数カ所ある。堂ヶ谷戸以外で主要なところとなると、大蔵、喜多見、烏山、尾山台などがあげられる。また、狛江市や大田区など世田谷近隣地域出土板碑にも留意する必要があることは言を俟たない。いずれ別稿において論じたいと思う。

板碑が大量に出土した意味は大きい。しかも、13世紀後半から15世紀半ばまでの板碑が確認されていることから、中世を通じて寺院や墓域がこの辺りに存在していたと推測される。寺があったとすればおそらく15世紀後半以降廃寺（はいじ）となり、墓域の板碑群もやがて一括廃棄されたのであろう。文献や諸資料からは、岡本の地に古寺・墓域の存在や伝承に関する記述は見当たらない。『新編武蔵風土記稿』岡本村の項は「堂ヶ谷」の小字名を記すのみである。過去の歴史を地名がしっかり伝えてくれている、まさに好例といえよう。

（学芸研究員　鈴木　泉）

【参考文献】
・世田谷区教育委員会編『世田谷区石造遺物調査報告書Ⅰ　世田谷区現存板碑集成』（1984）

写真2
阿弥陀一尊種子板碑・拓影図

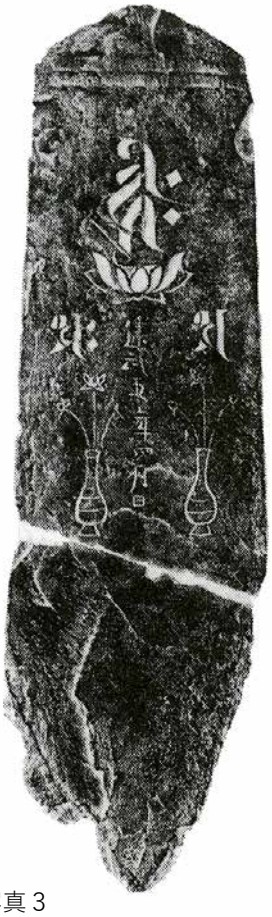


写真3
阿弥陀三尊種子板碑・拓影図

体験コーナー紹介

当館は８月１日に常設展示をリニューアルしました。その中で新たな試みとして、実際に触れ、体験できるコーナーを設けました。ロビーから入ってすぐの旧石器時代展示の一角には、「石器に使われる石材」、階段を上って縄文～古墳時代には「土器ドキパズル」、近世に「古文書を読んでみよう」、近代に「昔の教科書」の全部で４ヵ所、体験コーナーがあります。

石器に使われる石材

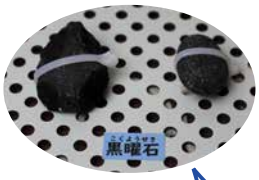
石は、私たちの生活の様々な場面で使われています。そして、鉄などの金属が使われるようになるまでは、刃物などの利器の素材は石でした。利器以外にも、昔の人々は、それぞれの石の特性を生かして道具として利用していました。例えば、槍先や石鏃などの狩猟具には硬くて鋭利に割れる石（黒曜石やチャートなど）、木の実を割り、粉にするためには粒子の粗い石（砂岩や閃緑岩など）を選んで使っていました。

ここでは、多摩川と相模川の石器に使われている石とともに、遠隔地から運ばれてきた黒曜石や、縄文時代以降に、勾玉などの装身具や石製模造品に使われたヒスイや滑石なども展示してあります。

実際に、石器に使われている石材に触って、少し持ち上げられるようになっているので重さも感じてみてください。

（前田知寿）

黒･赤･緑など、チャートにはいろいろな色があるよ。



黒曜石は、硬くて割れ口はとても鋭く、よく切れる。

土器ドキ パズル

縄文土器、弥生土器、埴輪の写真を使ってパズルを作ってみました。

縄文土器は、煮炊きなどの鍋に使われた深鉢形土器。

弥生土器は、貯蔵などに使われた壺形土器。

埴輪は、野毛大塚古墳の柵形埴輪です。

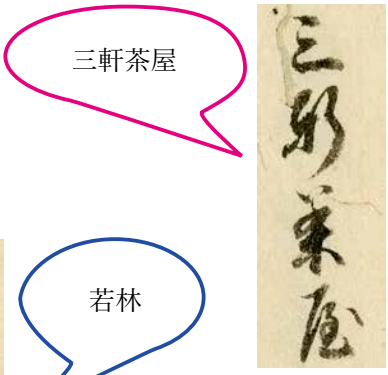
縄文土器と弥生土器は、常設展に展示してありますので探して、実物を観察し、パズルに挑戦することもできます。　（前田知寿）

古文書を読んでみよう

古文書体験のテキストとして取り上げたのは、「近郷順村往来（きんごうじゅんそんおうらい）」という史料です。この史料には、世田谷区や近隣市区町村の地名が、故事や語呂合わせを織り込みながら、次のようにリズムよく書き連ねられています。

上下宿に元宿や（かみしもじゅくに・もとじゅくや）、
齢ひ久しき鶴面の（よわいひさしき・つるめんの）、
千世の松原・竹之上（ちよのまつばら・たけのうえ）、
横根は生えて動きなき（よこねははえて・うごきなき）…

赤い四角で囲った部分は、江戸時代の世田谷の地名です。長寿の象徴の「鶴」や、「根」が生えて動かないなど、言葉遊びの要素が満載です。常設展示で紹介している史料の中にも世田谷の地名はたくさん登場します。展示品の中から、体験コーナーで学んだ地名を探してみるのも楽しいかもしれません。（角和裕子）

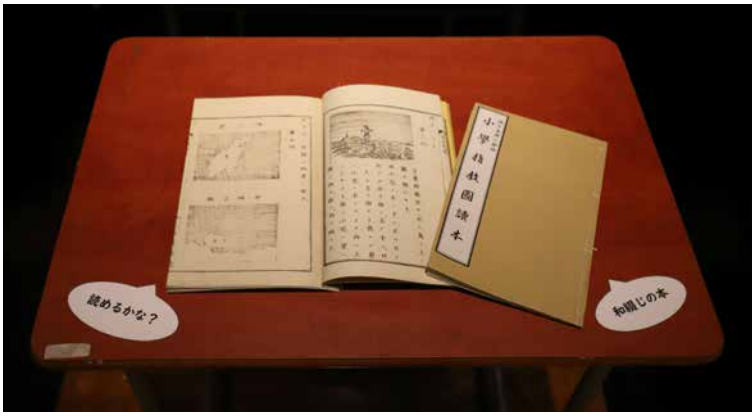


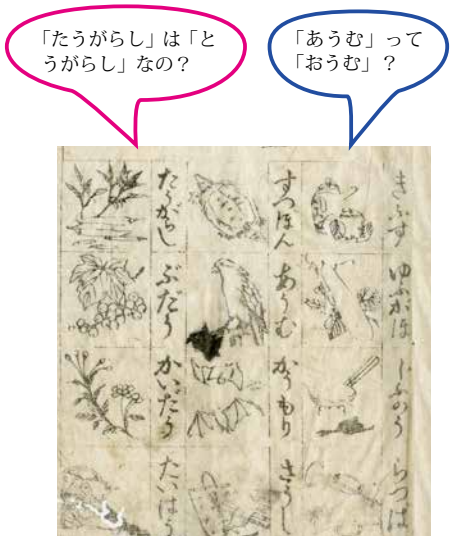
昔の教科書

明治初期の教科書は、江戸時代以来寺子屋で使われていた手習いや読み物のほか、新しく国が編集したものや、欧米の翻訳書や啓蒙書などでした。

この頃の教科書の装丁は、現在のような洋紙に印刷されたものではなく、版木を用いて和紙に刷られたものを、２つ折りにして丈夫な糸を使って製本する「和綴（わと）じ」にしたものでした。その複製を作ってみましたので、実際に手に取ってみてください。旧漢字が使われていることや、特に仮名遣いは今とは大分違うので、少し読みにくいかもしれませんね。

なお、このコーナーでは、順次複製本を増やしていく予定ですので、ご期待ください。（小林信夫）





夏休みワークショップ「絵巻物をつくろう！」

8 月 19 日（土）、早川陽氏（昭和女子大学人間社会学部初等教育科准教授）を講師に迎え、小学生対象のワークショップ「絵巻物をつくろう！」を開催しました。①障子紙に顔彩絵具でスタンプ②巻物づくり③お話づくり④絵と巻物を組み合わせて完成！という流れの 2 時間でした。午前 14 名、午後 11 名が参加し、最初は戸惑いつつも、“スタンプぺたん！” の初めの一歩を踏み出したら、あとは悩みながらも楽しく制作する子どもたち。保護者の方には無地のハガキをご用意し、子どもと一緒に絵はがきを制作しました。最後に早川先生から温かいコメントをいただきつつ、子どもたちの作品を鑑賞しました。来年度も夏休みに子ども向けワークショップを行う予定です。是非ご参加ください。　（松本知佳）

博物館実習

毎年恒例の博物館実習は、8 大学 8 名を受け入れ、8 月 22 日（火）～ 27 日（日）の 6 日間で行いました。

分野は歴史、民俗、考古、美術、建築、それに次大夫堀公園民家園での実習を加え、今年はバラエティ豊かな実習となりました。実習内容は、座学だけでなく、実際に資料を手に取って調書をとる、実測図の製作、屏風の下張り文書剥がしと目録作成、まち歩き、文化財の活用に関する発表など、博物館ならではの作業を体験してもらいました。

実習生は実際の資料を目の前に、慎重になっていましたが、徐々になれてくると、積極的に作業に取り組んでいました。また、大学での専攻と異なる分野の講義や、改めて世田谷の歴史について実習を受けることで、新しい知識や発見、視点を得たようです。　（松浦瑛士）

ギャラリートーク

8 月 29 日（火）14 時から、「重要文化財保存処理完了記念　野毛大塚古墳展」第 1 回目のギャラリートークが、展示担当者（文化財係　箕浦絢）によって行われました。企画展会場（展示室 3）入り口床面にある世田谷区の航空写真で、野毛大塚古墳の位置を確認してから解説はスタート。野毛大塚古墳が造られた時期は、5 世紀初頭、ヤマト政権の中心地が奈良盆地から大阪平野に移った時期です。野毛大塚古墳の形は、帆立貝形古墳で、出土した柵形埴輪や、埴輪の製作技法も畿内との深い関わりを示しています。木棺内から出土した多種類で多数の鉄鏃の形からは、当時の最先端のものが南関東地方にもたらされていたことがわかることなど、熱のこもった解説でした。参加者 10 名の方々とともに約 30 分間、特別に展示した重要文化財を実際に見ながらゆったり話しを聴くことができました。

（前田知寿）

資料館だより　No.78
発行年月日　令和 5 年 10 月 27 日
編 集 発 行　世田谷区立郷土資料館
〒 154-0017 世田谷区世田谷 1-29-18
☎ 03-3429-4237　FAX　03-3429-4925　　広報印刷物登録番号　No.2196